森林環境を生かした「いのちの教育」

山形県西置賜郡小国町立白沼小中学校
校長　倉　持　宏　幸

1　はじめに

山形県では、１７年度から「いのちの教育」を展開している。本校では、１８年度に文部科学省から道徳教育の研究委嘱を受けたことを機に、「いのちの教育」に本格的に取り組んできた。その重点の一つが、「自他のいのちを大切にする心を持ち、人や社会、自然・環境に奉仕し貢献する子どもの育成」である。「いのち」とは、主に自己や他者、動植物の「いのち」であり、とりわけ自然環境に恵まれている本校では、特に、人的環境も含めた森林環境を効果的に生かして「いのちの教育」を展開してきた。

2　研究方法と経過

「体験活動」と「道徳の時間」を関連させて、「いのちの大切さ」を実感させ、奉仕的・貢献的な「実践活動」を通して道徳的な実践力をはぐくむ「総合単元的道徳学習プログラム」（以下「プログラム」）を開発・実践する。

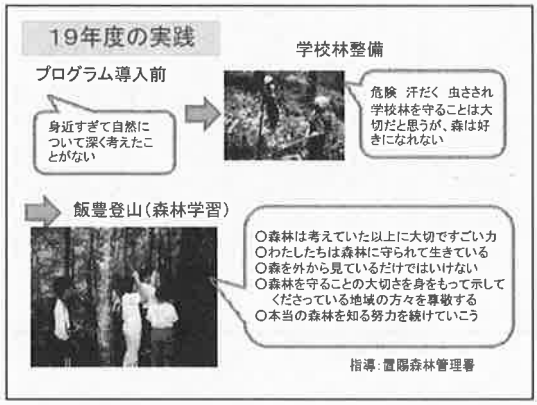
〈１８・１９年度〉小中合わせて１６のプログラムを開発・実践した。１９年度は、総合的な学習の時間（以下「総合」）の全校テーマを「木」とし、森林学習と道徳の時間を関連づけたプログラムの開発・実践に取り組んだ。

〈２０年度〉総合の全校テーマを「自然・環境」と枠を広げ、総合や教科、特別活動における自然及び環境の学習と道徳の時間を関連づけてプログラムを改善・充実し、実践を積み上げた。

3　実践の概要

中学校プログラム：テーマ「自然と人間との共生」（資料参照）

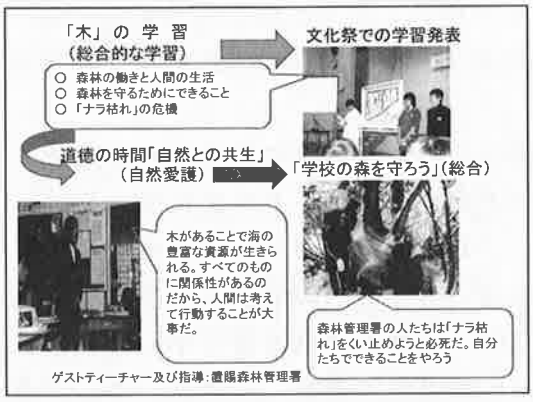
小学校プログラム：テーマ「身近な自然の再発見」



（１）子どもたちにとって、自然は当たり前、学校林整備は、生徒も教師も「毎年やっているから」という義務感が優先し、できればやりたくない行事であった。

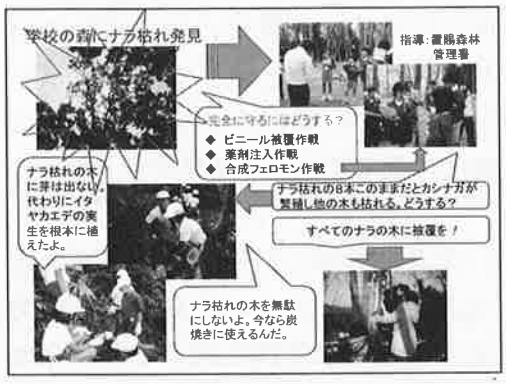
１９年度、プログラムは、１学期、恒例の飯豊登山から始まった。登山には、初めて、置賜森林管理署の方々に同行いただき、森林学習も兼ねることにした。子どもたちは、森の中で悠々と生きているブナの巨木と出会い、自然の尊さや美しさ、神秘さを感じるとともに、倒木や森林の生まれ変わる様を目の当たりにして、自然の生命の有限性に気づき、今まで深く考えなかった自然について強い関心と課題意識を持った。

（２）飯豊登山で抱いた思いは、総合的な学習の時間の課題となり、森林の果たす役割や人間との関係について追究し、それを文化祭で発表した。



それらの体験や体験的な学習を道徳の授業と関連づけ、海の資源を再生するために長い年月をかけて森林を再生した実話をもとに学習し、森を守ることの大切さを実感した。そして、隣接する地区にまで迫ってきた「ナラ枯れ」を身近な大きな問題として受け止め、自分たちにできることは何かを真剣に考えるようになった。そして、置賜森林管理署の方から指導をいただき、植物観察園のナラの木をビニールで被覆する作業に取り組み、目前に迫ったナラ枯れの危機を防ごうとした。

（３）今年度は、学校林整備を道徳授業の後に位置づけるなどプログラムを改善して取り組んだ。総合的な学習は、「ナラ枯れ」がテーマになった。春には、隣接する地区で発生した「ナラ枯れ」の現場を観察するとともに、ナラ枯れのメカニズムを置賜森林管理署の方に教わり、ビニールでの被覆作業を追加して行った。 そして、道徳の授業で、森を守ることの大切さの実感を深め、学校林整備に取り組んだ。その取り組みは、昨年度までのそれとは一変した。指導者である地域の方々に積極的に学び、大汗も虫さされもなんのその、森を守ろう、木のいのちを守ろうと、懸命に作業する子どもたちの姿があった。その背景には、学校林整備に教育的な意味を見出し、前向きに指導にあたる教師の姿があった。感想からは、木の生命力の凄さや先人の苦労とそれに対する尊敬の念、だからこそ引き継ごうとする自然愛と愛校心、さらには、この体験を自己の生き方に生かそうという決意など、「生きる力」につながる、生徒の主体的で確かな学びがあった。学校林整備は、教育的に価値のある行事として生まれ変わった。



（４）その夏、子どもたちの懸命の努力にもかかわらず、被覆しきれなかったナラの木８本がナラ枯れになってしまった。それらの木をどうすればよいのか、植物観察園のナラの木を完全に守るにはどうすればよいのか、課題になった。子どもたちは、置賜森林管理署の方に相談し、開発中の合成フェロモンの実験場を見学させていただいた。この方法が実用化されれば、ナラ枯れ防止が飛躍的に進むことに期待感を懐いた。しかしながら、直面した問題をどう解決するか、とにかく自分たちに今できるのは、たいへんな作業であっても、ビニールで１本１本を被覆する作業しかないことが分かり、黙々とその作業に取り組んだ。巻いた後に、木をたたきながら、「おまえ頑張れよ」と声をかけている生徒の姿を見て、教師は、ナラの木を「いのち」あるものとして接していることに心を打たれたと話していた。ナラ枯れした木はそのままにしておくと、

カシナガが繁殖し、他の木もやられてしまう。その問題の解決に、小学生から提案があった。ナラ枯れの木を伐採して炭焼きに使いたいということだ。早速、林業家の方にお願いして、伐採していただき、炭焼き小屋まで運んだ。ナラ枯れした木の根からは芽が出ないと聞き、子どもたちは、植物観察園でイタヤカエデの実生を探し、伐採されたナラの木の根元に大切に植え、たっぷり水をやった。

（５）木の内部には、カシナガの開けた穴が無数にあった。成虫や幼虫もいた。子どもたちはナラ枯れの原因を直視し、ナラ枯れになってしまった木のためにもよい炭をつくろうと、炭焼きに懸命に取り組んだ。文化祭では、炭焼き体験学習で学んだことを「炭太郎」という構成劇に表現して発表した。できあがった炭は、一年間あいさつ運動や自然学習、読み聞かせなどでお世話になった地域の方々に贈った。

（６）今年度、本校に赴任した教諭が、プログラムを初めて実践して、このような感想を書いた。プログラムにより、体験的な学習と道徳の授業がうまく結びついて、子どもたちは「木のいのちの大切さ」を実感し、自分たちにできることを実践することにより、「生きる力」としての「生命尊重」や「自然愛」、「奉仕の心」などを確かにはぐくむことができたと、手応えを感じたようだ。

プログラムを実践して（20年度赴任した教師）

道徳授業では、心の変容を目的とし、直ぐに実践に結びつけることは期待できないと一般的に考えられている。私自身も、本校のプログラムを知るまではそうであった。しかし、この取り組みを通し、学校林整備当日の生徒たちの様子を見、その後の作文を読み、身につけさせたい道徳的実践力を明確にし、その活動を仕組み、道徳授業を行っていくことがいかに大切かを実感した。

4　研究の結果

森林環境を生かした総合単元的道徳学習プログラムによる「いのちの教育」の成果

1　学校評価で「自他のいのちを大切にする心」に関する4項目すべてが「満足できる状況」
2　森林等自然環境を生かした総合単元的道徳学習プログラムの実践を題材にした作文や弁論の入賞・入選が続出
3　児童生徒会が、森林（木）への思いが溢れる「白沼自然かるた」を自主制作（別紙参照）
4　総合単元的道徳学習プログラムの研究実践が認められ、上廣道徳教育賞優秀賞受賞

「自然・環境」に関わるプログラムの実践により、形骸化しがちであった「自然・環境」に関する伝統的且つ特色ある教育活動が飛躍的に改善・充実し、自然愛や環境保全、愛校心や郷土愛など「いのちを大切にする心」を豊かにはぐくむことができた。その根拠は、次のとおりである。

（１）「自他のいのちを大切にする心」の育成に関わる学校評価は評価者全員が「満足できる状況」であった。

（２）プログラムによる学びを、作文や弁論に表現し、大会に参加したりコンクールに応募したりした。東北地区の大規模な作文コンクールで入賞者を出したのを初め、学校文集は２年連続で県の特選、少年弁論や英語弁論の大会で優勝や準優勝に輝くなど、今までにない好成績を収めることができた。

（３）児童生徒会が、「白沼自然かるた」を制作した。森林学習など自然学習から学んだことを瑞々しい言葉と絵で表現したかるたである。幸いに、上廣道徳教育賞優秀賞という全国賞をいただいたので、その奨励金でかるたをつくり、全校生にプレゼントして喜びを分かち合うことができた。

5　考　　察

「いのちの教育」における
森林環境の活用のメリット

- ○ 森林（木）と人間との関係が深いので、「いのちの教育」にかかわる多様な教育的価値がある。（例）木の生命力、森林と人間との共生、環境保全、自然愛護、愛校心、郷土愛、尊敬・感謝、生き方等
- ○ 年間通して、四季による変化（生命）を感じ学びながら、身近にいつでも容易にかかわることができる。動物と比して安定した教育実践ができる。
- ○ 炭づくりや木工製品の制作などを通して、木（生命）の大切さやありがたさなどを実感することができる。（再生し人間生活に役立つ木の命）
- ○ 「学校の森」や「ぼくの木・わたしの木」などとして、愛着をもってかかわることができる。一人一人がひとつひとつの生命とかかわるという観点からも数が多いことはメリットである。
- ○ 「生」のみならず、直接体験としての「老」「病」「死」が、動物に比して扱いやすい。
- ○ 身近な人々（置賜森林管理署や林業関係者など）から、直接、専門的な指導や支援を受けることができる。

この研究実践を通して、「いのちの教育」における森林環境のメリットをまとめた。

「いのちの教育」では、動物を飼育したり、動物を食べて生きていることを生々しく体験させたりする実践も見られる。しかしながら、動物を扱うのは、飼育の難しさや子どもの数に見合った個体数の準備の大変さ、安全面での問題など、なかなか一般化しないのが現状である。その点、樹木などは、ふれあうことも入手することも容易であり、生老病死も扱いやすく、自然愛護や環境保全、食などについても抵抗なく学習することができる。それをもとに、人間や動物に当てはめて考えさせることもできる。

このように、研究を通して、森林は多様な教育的価値を有しており森林環境を生かした学習は、関連的・総合的に行うことによって教育効果を高められることが明らかになった。

新学習指導要領では、「生きる力」としての体験に基づいた「豊かな心」の育成が求められている。それを実現するためには、体験活動の形骸化・イベント化や「活動（体験）あって学びなし」から脱却するとともに、道徳の時間を孤立化させないことが肝要である。プログラムを開発・実践し、関連的・総合的に教育活動を展開した本校の研究は、「生きる力」としての「豊かな心」の育成のあり方に一石を投じることができたものと考える。